

# 加藤清正の実像

10歳前後で羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)に仕え始めた加藤清正は、10代の少年期を秀吉の本拠地である近江国長浜(現在の滋賀県長浜市)で過ごしました。しかし、残念ながら長浜時代の清正の活動を伝える当時の史料はほとんど残されていません。今回は、伝記資料を中心に10代の頃の清正について見ていきます。

## 〈2〉長浜時代

北近江の戦国武将・浅井長政を攻め滅ぼした功績により、織田信長から浅井氏の旧領を与えられた秀吉は、天正元年(1573年)頃から長浜に本格的な城郭と城下町の建設に着手しました。自身初めての居城であったため、この頃に秀吉は、名実ともに信長配下の武将としての地位を確立したと言えるでしょう。このように秀吉が長浜に城と城下町を建設し、信長の重臣として台頭してきた時期に清正は秀吉に仕え始めました。ちなみに、秀吉は本能寺で信長が自害する天正10年まで長浜を本拠地とし、翌年には大坂城の築城に着手するなど、本拠地を長浜から大坂に移しました。これに合わせて清正も、長浜から大坂に移り住んだと考えられます。

さて、長浜時代の清正について、後世に書かれた「清正記」には、どのように記されているのでしょうか。それによれば、清正が15歳になって元服した時、秀吉が「加藤虎之助」と名付けて、170石の領地を与えたと記されています。しかも、その後、長浜城下で乱暴者を召し捕った褒美として200石を加増されています。また、「加藤家伝」という伝記にも「虎之助十五歳、落前髪、虎之助清正ト称シ、初メテ采地百七石ヲ領シ」と記されています。このように今までの通説では、15歳で虎之助(または清正)と名乗り始め、秀吉から170石の領地を与えられたと理解されてきました。しかし、これらについては、それを裏付ける当時の史料が残されていないため、後世に創作された可能性も否定できません。領地に関して現在確認できる確実な史料では、清正が19歳の時に秀吉から近江国に120



▲昭和58年に再建された長浜城  
(長浜城歴史博物館提供)

石を与えられるのが初見ですので、それ以前に15歳の少年に対して170石を与え、さらに乱暴者を召し捕った程度で200石を加増するとはとても考えにくいのです。それに、肝心の領地の場所が不明ですので、やはり後世に創作されたと見るべきでしょう。

名前に関して言えば、伝記資料や現在のほとんどの本には「虎之助」と書かれていますが、当時の史料には「虎介」と書かれています。秀吉が清正に出した手紙の宛名は「虎介」ですし、また清正自身も「虎介」と名乗っていますので、正しくは「虎之介」と表記すべきなのかもしれません。ちなみに、清正20歳前後の花押(サイン)は「虎」の上の部分と「介」の文字を組み合わせたものを使用していました。

以上のように10代の清正の様子については、後世に書かれた伝記資料しか頼るべき史料が残されていないため、史実とは言い難い内容も多く含まれているようです。清正は19歳頃まで戦に出た形跡がないため、それまでは羽柴家の家政向きの仕事に従事していたものと思われます。

清正の名前が確かな史料に現れ、歴史上に登場するのは、彼が19歳の時、天正8年まで待たなければなりません。